

柳田國男編

歲時習俗語彙

国書刊行会

「分類民俗語彙」の復刊にあたって

本年は、日本民俗学の祖・柳田國男の生誕一〇〇年にあたり、内外の学者を集めた国際シンポジウムが開かれた。これを期に、民俗学はさらに広い視野と質を伴った発展期を迎えようとしている。

昭和十年は、民俗学にとって記念すべき年であった。柳田國男の還暦祝を境として全国に民俗学の研究が澎湃としておこり、雑誌「民間伝承」が発刊され、地方では各地に民俗研究の同志が集まり、調査研究の報告をのせた、謄写版などの小冊子が刊行されるなど、幅広い研究活動が展開された。

今回復刻する「分類民俗語彙」一二冊は、いずれも昭和十年から約一〇年の間に刊行されたものであり、多くの研究者たちに利用されるとともに、それはまさに、民俗採集に伴う研究の進展を示すものであった。

この「分類民俗語彙」は、柳田國男が民俗資料を採集する上で取った方法で、ことばが、過去の日本人の生活の痕をとどめていることに着眼し、ことばを蒐集することにより、日本人の過去の生活、文化、風習等を探り、それを基に、民俗を分類整理しようとしたものである。

発刊当時、柳田國男は、日々の生活に過去の習俗を窺い見ることが不可能になってゆくことを憂慮した。今日それらの危惧は、まさに現実となって表われている。この一二冊の書は、失われた習俗を現在に伝える貴重な資料にとどまらず、柳田民俗学の精髓に迫る基本的な名著でもある。

この「分類民俗語彙」一二冊を再び世に問えることは、心からの喜びであり、同時にこれらの書が、今後の研究における糧となって活用されることを確信し、また新しい民俗語彙集への礎となれば幸いである。

この語彙の整理と印刷とに就いては
財団法人啓明會の援助を受けて居る
爰に感謝の念を以て此旨を銘記する

自序

村の年中行事の言葉を集めて見ると、盆と正月前後とに用ゐらるゝものばかりが、割合を越えて多いことがよくわかる。素よりこの二つの節日の大切であつたのは争へないが、一つには外へ出て故郷を懐ひ、もしくは年取つて少年の日を回顧する人たちに、特に印象の濃く鮮かなるものが、こゝに現はれて居たといふこともあるがと思ふ。其印象とは何かと考へて見ると、具體的には火の光、松のあかりが燈蓋となり、ランプとなり又は蠟燭となり、數多い提灯の火となつたことである。次には紙の美しさ、木を削つて花にした代りに、純白でたけの長いものを色々の形に剪つて、到る處に飾るやうになつたことである。それから今一つは餅のうまさ、及び其形と色艶のよいことで、是も亦横杵と大臼が使用せられる時になつて、始めて今までの水に浸した米の粉の糰に、代ることが出来たものである。他にもまだ斯ういふ隠れた力は幾つか有らうと思ふ。單に春秋二季の初めの、自

然の變り目が著しかつたといふ以上に、新しい文化の我々の感覺を動かすものが、偶然にも盆と正月との行事に集注して居たのである。人が一年中の祝ひ休みの日を節約して、成るべく多くの時間を生産に向けようとする傾きが始まると、祭禮の大きくなり且つ數少なくなると同様に、この二季の儀式だけが盛んになつて、他の月々の節日は少しづゝ衰へて行かねばならなかつたのである。

『田園の風物を咏歎しようとする事業と、生活様式の由來變遷を究めたいといふ學問とは、手を繋いで行くことが幾分か六つかしくなるかも知れない。我々も近世の御正月と盆とを樂しみつゝ、大きくなつて來た者ではあるけれども、それと思ひ出し又なつかしがつて居ただけでは、何故に是が此様に強く忘れ難く、日本人の心を捉へて居るのかを説明することは出来ない。獨り年中行事の問題のみと言はず、他の多くの所謂日本的なるものに就いても、當世が之を好むと否とに拘はらず、今一つ背後の徐ろに消えて行かうとするもの、幸ひにして尙若干の痕跡を留めて居るものと合せて、一括して之を考察するやうにしなければ、本當は文

化の展開を談ずる資格が得られぬのである。さういふ中でも年中行事などは、是でもまだ以前の段階が、比較的明瞭に残留して居る方である。手杵で餅を搗き、削り掛けを以てしでに垂れ、手火を投げて火祭をする風習が、田舎の隅々にはまだ傳はつて居るのみならず、數多い月々の節の日なども、一部では全く忘れられ又一部ではたゞ痕跡を存し、又他の地方では嚴重に古い仕來りを守つて居るといふものが、たとへば私の郷里の十一月のニジフソのやうに、次々に明かになつてゐるのである。少なくとも此區域に於ては、獨斷は何等の威力も無く、たゞ事實に基づいて歸納し得る者だけが、正しい知識に到達するといふことを經驗させてゐるのである。多くの珍らしい見聞は此書の中に集められて居るが、單なる好奇心に投ずるといふことは我々の目的ではない。他日はが練習の一つの機會となつて、同じ方法の弘く他の無形の疑問にも延長せられることを念ずる爲に、先づこの簡明なる題目を整理して見たまでである。

以前「旅と傳説」の誌上に、年中行事調査標目といふものを連載した時には、私

は之に據つて一つの採集手帖を作る計畫をもつて居た。此集はそれに比べると語數に於て倍以上となり、項目は却つて約三十を減じて居る、十月四月の満月の夜を始めとし、曾ては我民族の間に重く視られたかと思ふ五月二十八日、又は中世の印地打ちの日として、記録にも残つて居る四月二十二日等、是から問題として注意して見たい日を加算すれば百は超えるのだが、それ等は採集の今少しく進むまで、暫らくこの列記の中から省いて置くこととした。古人が年を生活の一つの單位と認めて、四季の行事を互ひに關聯させて考へて居たらしいこと、従つて今見る盆正月の特異なる行事にも、既に埋没に瀕した他の日の言ひ傳へを參酌して、解釋の手がかりを導くべきものが多いことを考へると、此集は寧ろ一回の中間報告の、それも稍早期に失したものだといふ批評を甘受しなければならぬであらう。今後の採集が愈々必要であり、且つ必ずしも興味の乏しい仕事でないことを、例示し得たことを以て満足すべきもので、勿論完成といふものからは大變な距離がある。日本の未知の知識はそれ程にも豊富且つ重要なのである。

目次

序文 目次

一	節日總稱	一
二	大小の正月	五
三	年神棚	一五
四	年宿年繩	二三
五	松立て	三〇
六	年木新木	三八
七	幸木と懸魚	四八
八	年男の役目	五六
九	身祝と年玉	七三

一〇	門あけ・門おとなひ	八
一一	わざ始め	九
一二	初山踏み	一〇
一三	松の内	一〇
一四	六日年・七日正月	一〇
一五	餅あはひ	一四
一六	節分行事	一五
一七	田打正月	一五
一八	花正月	一七
一九	物作りと皐月祝	一八
二〇	祝箸・祝棒	二〇
二一	世の中ためし	二二
二二	木まじなひと嫁祝	二二
二三	墨塗り白隠し	二六
二四	鳥追・土龍送等	二六

次	目	
二五	小正月の訪問者	二八三
二六	火祭と小屋生活	三〇六
二七	もちの粥	三三六
二八	佛の年越	三四三
二九	二十日正月	三四七
三〇	忌の日	三五七
三一	薦の年越	三六〇
三二	初ついたち	三六四
三三	二日灸	三七一
三四	事八日	三七四
三五	初午と春亥子	三八五
三六	社日と春彼岸	三八八
三七	雛遊び	三九六
三八	春ごと	四〇七
三九	卯月八日	四一四

四〇	五月節供	四二
四一	六月一日	四三
四二	川祭と祇園會	四三
四三	新箸の祝	四二
四四	夏越節供	四六
四五	釜蓋朔日	四九
四六	七日盆と眠流し	四六
四七	盆花迎へ	四八
四八	吉事盆	四七
四九	宵盆	四八
五〇	盆棚飾り	四八
五一	荒棚と無縁棚	四九
五二	精靈火	五一
五三	送り盆	五三
五四	盆竈と門飯	五三

五五	盆の終り	五五
五六	八月朔日	五四
五七	芋名月	五四
五八	三九日	五一
五九	十三夜	五六
六〇	神送神迎	五六
六一	亥の神祭	五七
六二	十日夜と十夜	五九
六三	霜月祭	六一
六四	大師講	六〇
六五	川渡り朝日	六三
六六	納め八日	六三
六七	正月始め	六三
六八	神々の年取	六八
六九	暮の魂祭	六七

七〇	松迎へと正月支度……………	六八五
七一	年夜年籠り……………	六九二
索引	……………	七〇五

一 節 日 總 稱

ヲリメセツビ

節供といふ日は現在に限られて居る。其以外の年中の祭り日祝ひ日を總括して、何と呼ぶべきかを知らぬ人も多い。地方の實際を見て行くと、是をもセツクといふ例は素より多いが、節は漢語だからなほその今一つ以前の名があつた筈で、それにはヲリメといふ言葉が、今は知られて居る唯一つのものである。鹿兒島縣の一部では是をオイメ、又はオイメセツビと謂ふものがそれで、此中には所謂五節供の他に、十月十五日の御日待と毎月の月待、十月亥日の農神祭、九月十九日の秋祭等、大小の民間祭日は皆算へて居るが、たゞ正月は十四日の田神祭だけしか入れて居ない（始良地方の研究）。オイメの折目であることは沖縄の例でわかる。此島でも亦大隅と同じに、折目節日といふことを謂つて居た（南島八重垣）。喜界島でシチウンミといふも節折目で、或は單獨にシチともいふ。シチが節の音であることは舊八月の節折目の日に、

初生兒に水を浴びせる式を節浴と書くのを見てもわかる(趣味の喜界島史)。但し年内のすべての祝祭日をいふか否かは確かでないが、折目も節も名の起りの同じであつたことは疑が無い。對馬の佐須奈でも節日をヲリメキリメと謂つて居る。

トキヲリ 奈良縣は一帶に、盆正月祭禮その他の農家の休み日を、時折又はトキヨリといひ、之に對する常の日をアヒダと謂つて居る。節を意味するヲリメといふ語と、起りの一つなることは察せられる。他の地方にも往々此名があつて、トキは節に該當する古語であるらしいが、今は單に時々といふ程の軽い意味に解して、餅や赤飯をこしらへる日のことだなど、謂ふだけである。

オセチ 正月は節の最も重要なものである故に、是だけを特にオセチといふ處が多い。さういふ中でも東京のやうに、除夜の年越の正式夕食だけをオセチといふ例もあれば、正月中毎日晝の御饌を神棚に上げること、オセチと呼んで居る地方もある(西美作方言集)。或は松の内に日を定めて、親戚を招いて酒宴を催すこと、即ち阿波などでセチ客といふものを、オセチといふ者もあつたのである(飾磨郡風俗調査)。東京周圍の農村のセチも是で、正月十一日までの間に、饅頭などで近隣の人を招き合ふ(旅傳五卷一號)。此風習は埼玉縣にも廣く及び、やはり是をセチ又はオウバンと謂つて居る(入間)。東北地方でも、月送りの二月二日をセツと謂つて、親が

子供の所へ禮に行く日だといふ處がある（西田川、旅傳、一〇卷五號）。

セチワリ 伊勢の宇治山田市では一月の十一日、鏡餅を割つてゼンザイにして食べることを

セチ割りといふ（市史下卷）。是は正月の御供へをセチ餅といふ爲で、爰でも亦他の一年中の節折目を、もうセチとは謂つて居らぬのである。

セチザウリ 壹岐では正月の家族の新らしい履物を節草履、又は福草履とも謂つて、除夜に

掃除をすませてから表口には是を竝べる（民俗誌）。此風習は他の地方にも多いから、名稱も同じいものがあらう。是も正月だけをセチと呼ぶ一例で、なほ年木をセツギ、正月用意の米をセチゴメといふ處もあるのである。

セチマ 三月四日の休み日をセチマといふ處がある（群馬郡誌）。節供の翌日から節間であらうが、此日は特別に警戒すべき日となつて居て、普通の節間とちがふ故に此名を傳へたのかと思はれる。五月節供の翌日も氣になる日で、東北では田植を一日休む處が多いが、攝津豊能郡の或村ではこの日をセツダと謂ひ、山田の植始めをする日として居る。セチ又はセツが節供の「節」と同じ語であつただけは、少なくとも是で明かである。

サンセツク 五節供といふ語は人がよく口にしたが、三つまではよくわかつて他二つはまだ問題がある。さうして此以外に節供と呼ばれる日は、また地方には十以上もあるのである。

三、節供といふ日も埼玉縣などには、上巳と端午と八朔とを數へる者があり（幸手民俗誌）、九月重陽は其外になつて居る。節供は節日に神と人とに食物を供すること、延喜式以來既に其語が文書に見えて居る。歴代の記録を見ても節供をする日は多く、九月九日の他に七月七日、正月も元日と十五日とが其中に入り、捜せばまだ幾つかの節の供をする日が見出される。現行の例でも肥前馬渡島などは、盆の十四日がオセツクである外に、十二月十三日もセツク、同二十一日から正月七日迄のうちにも、セツクといふ日が何日か有る（民俗學四卷八號）。